



骨董集下



15
232
2



江戸 醒齋輯



勸進比丘尼繪解

下にいざせむ古画その風林をりて時代を考ふる。寛永の比叻けるりのみ。勸進比丘尼の繪解とる。体もどあるべし。東海道名所記

浅井了意作 万治中印本 卷二下云

つものころり比丘尼の伊勢熊野にまゝをりて。其の中は声しく哥をうへひける。熊野ままのる。この故は熊野比丘尼と名づく。其中は声しく哥をうへひける。わめのありて。うへひて勸進一たり。その才子まゝ哥をうへひたり。まゝ熊野の絵と名づく。地は極楽とて六道乃あり。根を絵よわきて。後とれたるは。折らうくたれ。まゝ女房達へ寺にまゝて。談笑するんども。きく事あられば。後世をまゝぬ人のために。比丘尼のあつたれ。がらやうをゆめたり。なるあり。りつ乃留にらるる。うへひて。満堂仔細まのれども。行をもどせ。中。後とる。

○古画勸進比丘尼繪解圖

柳塘館摹藏

按此画は今より九百八十年
 前より前實永中より
 後より久し既に白紙布を
 きたたふらふたあり
 七十一番職人尽みの
 絵を合せてるべし



あべい

○漢土は五月五日艾みてちひさき虎をけくまをひきくまありそれを艾虎と
 せり漢籍よあまうこえたり和漢相似たるあり

○端午の頭巾袈裟小人形

今より九百三十年前延宝天和貞享元禄の比は五月五日男児紙を造れる
 頭巾袈裟を著山伏の体に出きておびし奉りありき日次紀事 延宝 五月

五日の條よ云「以柳木作大小刀是謂菖蒲刀男兒横之」

於腰著頭巾倣山伏躰云云 雍列府志 貞享刻 小川人家 端午

午所用木刀或謂菖蒲刀云又木長刀木甲曹山伏

之頭巾袈裟并藥玉等物賣之云云 物傳 享保十 六七十年

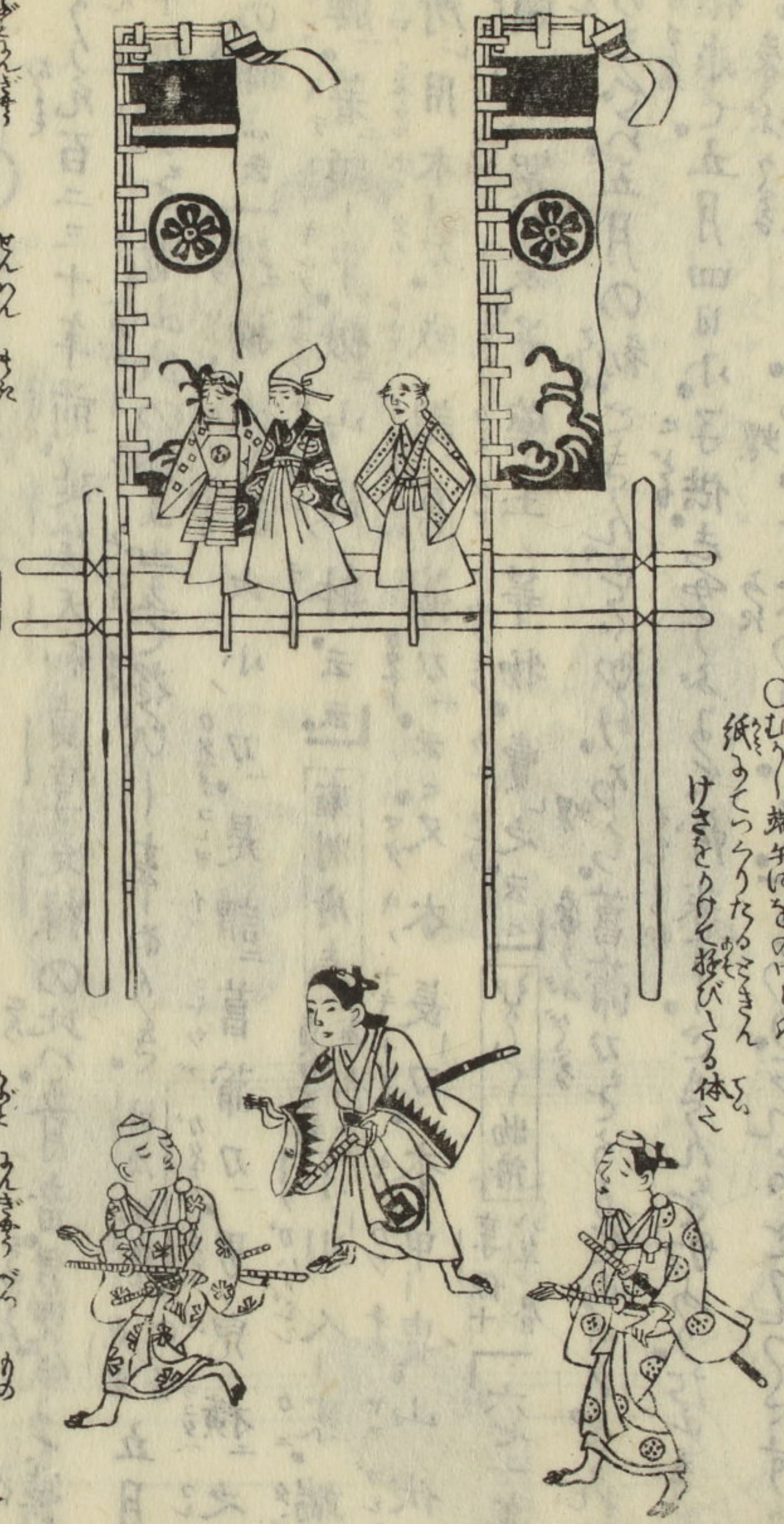
又云まぐら五月の初とまきんまぐらゆけあら菖蒲刀をうりてありくそれを

子供求て五月四日小子供志をうぶくと併巻しとまきんをゆけたりたまきを

ゆき菖蒲刀をさしあらしを吹あり云云」とありされらとえりすすよ

とて下古画よのとうあり今もとれ小なる事なればはばし

○元禄年中の印本 大和耕作繪抄 卷二小所裁の図あり 蔵本



○ひし端半にきりぬい
紙をこつくりたるまきん
けさきりけと扱ひしる体

○由人形のみは先板の巻もゆり元禄のころいそぎよくのぞく曾と人形と別のゆよるれり
人形の制の節々素をとりて其角か五え集よ一とてゆきや傘よつる小人形といひし
い後とあるは時代なればは人形のゆよるべしそのころと目のまじりたることありし
きりぬいにぬぼりし

骨董上編下之後三

古事記白
棟原宮段
宇波那理
大和物語
又檜垣
集二のころ
ころころ
ころころ
前妻をさる
古言く

○後妻打古図考 四

ういありとい後妻をさる古言く 和名鈔 後妻 和名宇波奈利 新撰字鏡
嫌 宇波奈利 日本紀 卷二 嫉妬の二字をさるゆり後と訓り
昔ニ物語 ころころに室町家の比のころころや 相当打といるゆりころころ

ころころゆり打らゆひけるゆり 妻を離れし後妻をむり入るゆり
其あつふりり前妻をさるき女どもをたのめ 相当打を催し ころ前小後
の妻の方へ使ひをほりて 某の日某の時相当打よくきりしをいひしり
其日ゆりこれ前妻をさるゆりゆりてあつふりり女ども ちのころゆりゆりゆり
をりらて後の妻の方へゆき 墓所ゆり入て打まらる 後の妻の方ゆりゆり
女をたのめあつふりりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
の媒妁せし者の妻と待女郎小ありし女と 双方の中よりあつふりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
以上 撮要

○さておき打の名はいまど化の昏もいふありとせ

賣物集 卷二云 村上帝の宣耀殿の女御芳子と小一條左大臣の御

娘打戯しとたつしきんを覗て御覧しつらぐ 餘小妬思けるやどに九條

右大臣師輔の女御を土器の破ゆて打給ひけることを聞えしとて御兄

の後原一條殿伊尹堀河殿兼通三條殿兼家三人あがり所御とまり

小成給ひ小つととて聞えしつらぐ増ての午の下子づもの後妻打とるを

とて髪をわらうり取組引組とらん理もど侍るべき云云

源平盛衰記 卷一云 村上帝の御宇左中將兼家と云人あり北方を三

持たれば異名よの三妻誰と申けり或時此三人の北方一所よ寄合そ如色

頭とて打合取合髪わらうり衣引破りあんとて見苦しかりければ中將の

穴六借とて宿所を捨て出給ぬ取らうる者もあて三日まで組合て息つき

治承二年
今文化
十年
六百三十
六年

骨董上編 下史後四

居たり二人の打合の常の事也とて三人あれば誰を敵共あへ向ふを敵と打

合けることを咲しけし云云

宝物集とは昏と時代もあつたかたにやうも二昏もに

村上帝の時時をいひたりありければあり打のいふやう

狂哥咄 曾呂里狂哥咄と云の後 卷二云 教月上人としたかたのひびと

をめぐり城初しけるが筑紫のある里に女房のうらありちをあひはりて

そとてななる

○但し此昏の書に後の物あればたしある證よの志がしといひたれと

教月の古くあり 沙石集 卷五 三井寺小教月房とて中比碩学有り

云云 三井寺小教月坊法橋と云人

あり如法経を書寫するごと四十度云云

右のうらあり打の哥は教月のうらありとて哥のありとも

思ひ合とて承久のみいふれし哥をいふて命たりし清水寺の住侶

續拾遺集 卷七 哥ありて京月法師 作者部類 京月清水寺ノ僧とあり 承久記

古物きせう月印本鏡月よ作たり右の教月とい別く又狂哥よ名なりあり

弘安六年
今文化
十年
六百三十
六年

古くは
後妻
打の
図

け女
後妻
ある
べし
かいらよ
むとびた
あづのの
あつらひ
さめとあ
あつらひ
能の女の



あつらひ
上古の
りら

追加
一後千
不
ろ一
あ
は
さ
は
此の

〇
又
人



此
宿
寓

和名抄
前妻
和名
豆毛止
茶云



ウ
あ
その



ひ
お

同書

山の井
ら

賢直上

教坊梨園及小蠻樊素之流所謂古之歌舞妓也

服女服男服之断髮為男髻横刀佩囊云云男女

相共且歌且踊此今之歌舞妓也出雲國淫婦九二

者始為之列國都鄙皆習之云云此又中之

野槌下之卷云龍紀畧第一云元順宗至正十三年中

元主每遊宴以官女十人按舞名為天魔舞一首垂髮

數辭戴象牙冠身被二纓絡云云近年出雲巫京まゝ僧衣を

て鉦をうら佛号を唱へて始念仏をなりと云ひ小その後男の装束

口を横歌舞を俗よりゆきと名づくせの風俗如此後ねると慳富と物語

下に胡えの天魔舞今のあまきに似ててたかなりと云はれま

かあまの腰にやうらうらのとまあをなれたるとえの天魔舞はままなりと云ひ

りに似しりと似れるをさらなりなり野槌のあまの自序はのとのとの秋とあられり

冒童上編 下之後

元氏披庭記を引く
天魔舞のまを裁たり

その物語

寛永十八年印
本杏花園藏

小云「そは乃らろわひ出雲乃圃

よ小村三ち樹つとり人乃びをめりにてしひてあらゆり小むはるなを

した杖女ゆひいが中畧此杖女男舞うふきと名付てをみりく切折

まのちよ結さやをを指まのほのつと名付今なるをうひふらよ

のなまれ世へみえ顔色を双りて神をひる也とをゆひをえる人を

まどいせりそれを見りこのりと諸國乃杖女のあまをまるび一座の

役者をそろく舞臺をまわれ笛たとはらを打なりし祐どを戸をま

りを諸人よっんせりる云云かのも下の古画にみゆり○けの倍の卷首よいり

れを諸人よっんせりる云云江戸所の古画にみゆり○けの倍の卷首よいり

りを諸人よっんせりる云云思老旧ならればいまを被入るにまる

られば又明代の京童明曆四卷一よ云「そのくらづきとのあの出雲神子の舞

とまるびとめ一也このこと仏号をまるく鉦をまるく念佛からりせ後

又のそとて男の妝束よと哥舞とをこれとつぐれといひるべきたはる

云云 東海道名所記 万治年 卷六云云 ひとりしく京に歌舞妓の道

まりし出雲神子小あつとつるりの五条れびりの橋つづり

中子とつりといひるその後水社の東に舞臺とに

念仏をとりよ哥をまぐりり差ふれあぬのこをまとい鳧鐘

を首よりして笛つゞ小拍子と合せてをどりけりその時ハ三味線ハ

またあつて三十郎といふるお玄附をまよまうけ傳助といひものを

あつらひて二条繩よの東のく紙筆の所よりろよ舞臺とを

さめぐよ舞臺とを二十郎がね玄傳助が糸よりとを

これよりうらうられてお拍子つるあつた六條の傾城所より佐渡嶋といひ

醒云云 佐渡嶋正吉 四条川原に舞臺をたてしやの數多し

醒云云 佐渡嶋正吉 四条川原に舞臺をたてしやの數多し

とあり大き女のをまする

作者ハ中川喜雲中川氏云云

家督京童部日後編あり没年詳あつべとあり許六が歴代滑稽傳

立圖ハ画を能く京童と云名所記自画也とあり元禄十五年印本

立圖寛文九年九月晦日卒とあり誹諧家譜ハ寛文十二年三月十七日没

とありつづれり是るをたつた作者長中二にがかきさうりる

十五六歳ありあり作者長中二にがかきさうりる

六年前本 女張子 卷一 義端が序の文ハ林意大徳晩年

元禄四年寂りつづれり行年ハつづれり

この生れるべけれられもたつたのこをまといきつづれり

のらにけるのこをまといきつづれり

和事始 卷之一 白拍子の傳ハ天和三年の著述

歌舞妓事始 卷一 文禄年中依つて於圖をそれ哥舞妓を踊ら

はえ物あり一時水日明の殊数を襟小くけて舞たるを以て水日明

とあり

○慶長年中の繪於國哥舞妓圖

原本梅龍園藏
摸本著作堂藏

○正後子三後子
東海名所記
その時の三味線は
あつりきとりのよ
舞合と。
○うらをもちへうたえ
をひびくるといひ
アえたる。侍あさる
かうとる侍あさるべし。
こうたんとあさるの
あさる。先板の巻も
あさる。
○椅子よ尻わけたる
うらに男よ拾したる
作らるべし。
羅山先生文集
ふ女の
髪を
削て男の髪とす
刀をうらとる。髪を
あふとあるに舞合と
又。
そら物娘よ。髪を



みどり切りさうじ
よあひさつとらる。
としのあつとらる。
り又京童よ。髪を
うらとる男の装束
よとあさる。髪を
あふとあるに舞合と
○念珠をさびくうけ
たる。哥舞妓事始
の鏡よわたり。その
紋つけたらめめづら
紐糸の巻。先板の巻
よとあさる。髪を
あふとあるに舞合と
あふとあるに舞合と
あふとあるに舞合と
○羅山先生文集
ふ
男の髪を削て男の
髪とす。髪を
あふとあるに舞合と
と三十郎あさるべし。
ひもをさしとらる。
あふとあるに舞合と
ハ前よとらる。



○かゝる髪を倭装を看取り髪をとりん。
 かにかんぶつをとりんの作るべし。

○海名和記よ。
 ぬり髪をよられるもの
 こゝみのをまこと
 息遣をよびよる
 云云とどろく符合せ
 玉佩はゆきり
 あれどもこゝみのを
 だれとみるありし
 あるべし。足袋のむく
 さねよろどれりえ
 板の巻よゆるむく
 さねなびられなり。京童
 小仏早とる之指をあは
 念仏とるりサ。と
 りのゆきよろあり
 ○こゝに合珠をよびよ
 かじりる男はにがま
 三十郎のべし。
 ○あゝのどろくまごま
 古春の符合するを
 ては園の真ありを



○中世
 につかぬがえの天童舞は似たりと
 つけられし腰はさうらのごたけとたれと
 つけられし腰はさうらのごたけとたれと

かゝる髪を

○つん物の人男女とも
 くりぎりのしりりてを
 あつらひさど人目をあ
 ぶ作へおくるおた
 せるとどれりえ
 むくの質直の
 風俗をよれらよも
 みるべし。前よもゆる
 かくあゝまをま
 ぬきたららごまに
 質朴あり。

○は後をよれば。
 慶長年中より。今
 文化十年までかまを
 二百十餘年のしりの
 質素の風俗目のま
 ようなごまにその
 せをよるららごま
 どのうくにあつた物ら
 をあつたりとど。



○比比丘女図

られ今のつづまよてほをさるるふしと
 とりからいほびの原より比丘比丘尼と
 つまを音ほよそひふくめしとあり前も
 いふらとて惠心院の僧都よりとまれり
 さればいふとふたれり

日本法華験記下の巻よ云
 僧都道春秋七十六
 以寛仁元年六月十日
 寅時刻永遷化矣
 此ありは昏の僧都の
 滅後り今に二十
 五六年をまき
 長久中よ
 撰せる物なれば
 傳とさるにたれり
 續本朝往生傳十一
 元亨釈各卷四
 元亨僧都の
 傳を載く入滅
 の年月日るらびよ
 享年これにあらず



骨董上編下之後十五

寛仁元年より
 今文化十年まで
 八百七十九十七年と

○又鬼りごとく見を
 さらへるまねびとる
 即ちむねびもはひのめ
 一と今そのまよ
 鬼といの名のあらん

物類呼一巻五よ云
 江戸の鬼りごとくと云を
 東國及出雲肥の長崎
 くと鬼ごとく云奥の仙臺
 ほとあふくと云常陸よて
 鬼のさらと云とあり

○のろりよとも月令廣義 卷の
 打鬼戲いさ小の
 打鬼あり通雅 卷三の替鬼
 打鬼の目やりのたひよとありよ
 鬼といの名あり和漢あひ似る
 事と



○これれ古画よめら
 三国傳記の
 あひむきを
 とて今あつた
 けとるたる図あり

一柳青筆

○ 編笠を切ぬたたる古図 十



これいかに屏風の後の
風俗を
考へ
時代
考へ
寛永正保の比の

此は梅峯

此男の
上は落たる物の今の
襦袢との異なり此考へ
別よりの袴の黄土を
りて彩色なり

煖革の
イ多の
靴袴を著
たる事いふた
物いふ
おわ

江山堂藏

骨董上編下巻十六

○ かくとあそび 十一

宇都保物語 初秋の巻よま草のあつに笛の音の志ゆをだげ秘してあひ

草笛をこそあてけれ大将おくれあそびを申作とんとあそび

云に 栄花物語 ほほむらひの巻長和三年の條よま草のあつに

たのひまこえ隠れれどあつとらろはたあそびもそればあそびのあど

もそらつげたるらちしてそれをあつぬらとにそむ不された

れんがあべい。たのひのあつにたのひのあつにたのひのあつに
書言字考よ。白地蔵の三字をわくれあそびと訓づる。白地よあつにたのひのあつに
の義あつに。〇寛文の比にたのひのあつにたのひのあつにたのひのあつに
あつにたのひのあつにたのひのあつにたのひのあつにたのひのあつに
隠期あつにたのひのあつにたのひのあつにたのひのあつに
はらねあつにたのひのあつにたのひのあつにたのひのあつに

物類稱呼 安永四 卷五よま草のあつにたのひのあつに

あつにたのひのあつにたのひのあつにたのひのあつに
あつにたのひのあつにたのひのあつにたのひのあつに
あつにたのひのあつにたのひのあつにたのひのあつに
あつにたのひのあつにたのひのあつにたのひのあつに

○目さしどら軒乃雀 十二

今もの童はび小目さしどら軒乃雀なり。或いめんさしどら軒乃雀なり。そまは室町家の比へぬ。どらのたのすめといひけり。福富の草紙 上の詞書より

竹取上
ゆらくと
かひね
軟障
古暦一
まてえ

好古小録 上の福富草紙二卷画工及書者姓名不傳とありて時代
詳まらば今詞書を案とす。めらくと申たところ。せしやうだらりのあど
今の古れた詞づひのあらう。尻をぬごころ。腹をかあつ。放屁をかあら。小袖と
ぶさどらる詞のまどれるよく。かやめて室町家の中らうのおとかなの
縁も又あつ。かやめる證あり。

○又一休和尚の水鏡 上の目さしどら軒乃雀より

あり 水鏡註目無草 上の目さしどら軒乃雀より

○又目さしどらる名も古れたおよそ 酒食論の詞書より

あそびも酒のあらう。もさしどら軒乃雀なり。呪師さき玉のさしどら軒乃雀のめらび

あつげたり。さしどら目さしどら軒乃雀なり。ひびくさしどら軒乃雀のめらび

○新編大はくば集 万治三年撰 寛文七年刻
吉細 柳枝
卷二十二 雪の中やめらるるさしどら軒乃雀
これ万治寛文のころまて もめらるるさしどら軒乃雀のめらび

○めれられを考ふるよめらるるさしどら軒乃雀のめらびとさしどら軒乃雀のめらび
むれはむさしどら目の雀のさしどら軒乃雀のめらびとさしどら軒乃雀のめらび

さしどら軒乃雀のめらびとさしどら軒乃雀のめらび
○漢籍どもは此の目さしどら軒乃雀のめらび
○目比 十三

今童の戯しむるさしどら軒乃雀のめらびとさしどら軒乃雀のめらび

治承四年
ヨリ今文
化十年
マテ凡
六百三十
四年と

長門本平家物語 卷九 治承四年、清盛入道福原に在て夢よされぬと。

ふらふらめりる事をしる所よ入夜もまけどられをよらぬ終末たどる人を目くらををするやうなだひよまきもせどことよらまてをるる

日蓮御書録内 報恩抄の上よ云 慈覚知證と日蓮とが傳教大師の清奉

ふ不審申の親と値ての年あうそひ天と値奉ての目くらめくもて後く

いもの云に 建治二年七月 太平記 卷十 建武二年十二月十一日 箱根竹下合戦

の條よ云 加様と月くらべして鎌倉より集り居ての叶まじ云に

異制庭訓往來 正月七日の消息の中に遊戯の名目をあてて目比頭引

藤抜云に とりり此目へ貞和二年の作るらんとなれらるえりてよらまてくらと

いふ事のためらあまきをあてて此事の先板の巻よめられどら

うまればあまびりよ

○宿世焼 十四

骨董上編 下巻後本

異制庭訓 遊戯の名目をあてて「宿世結・宿世焼」といふ右

目あり宿世結の先板の巻よめりて今このせの縁結とて宿世

焼の事を考へる増補越後名寄 著作 卷三十二よ云 正月十五日左義

長の燃残りの本を宅の炉中と焼其火も縁結の焦焼と云事を童

部共あて資の脹とて品形を稱て具と云にといりこれ宿世焼の遺

意のあらざり縁結のめら焼と稱のていふやとおやゆ

異制庭訓を貞和二年の撰と決ひとて今文化十年まてあてて四百六十八年とて

○見世棚 十五

今の世よ商人の物賣所をたるもの見せともいひて家の端よ棚閣

をまらけ其上よ万の賣物ををかきあてて賣らるるもの名あて

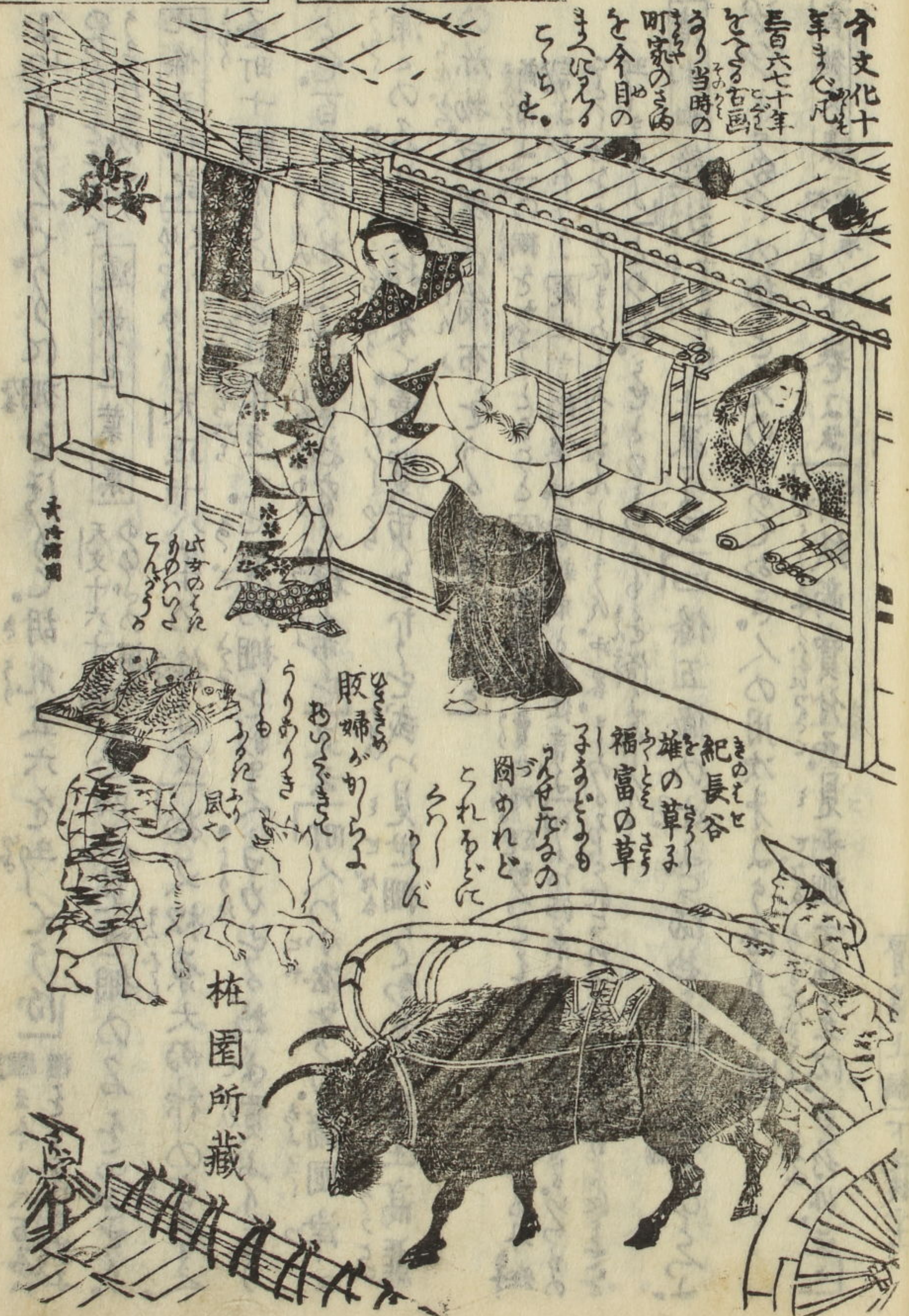
まらその棚いり物をとまき往來の人よんせて賣らんためよ

物あらば中古ハ見世棚といひ後よそれを中畧して見せと

福富の
草子の
えせなま
の園も
のれんご
三三たら
むきを
あいら

笠ねる
かのと
あのかし
らん職
くまよ
らん職
板金剛

今文化十
年
三六七十
年
とるる
あつ
町家の
を今目
まはる
くらと



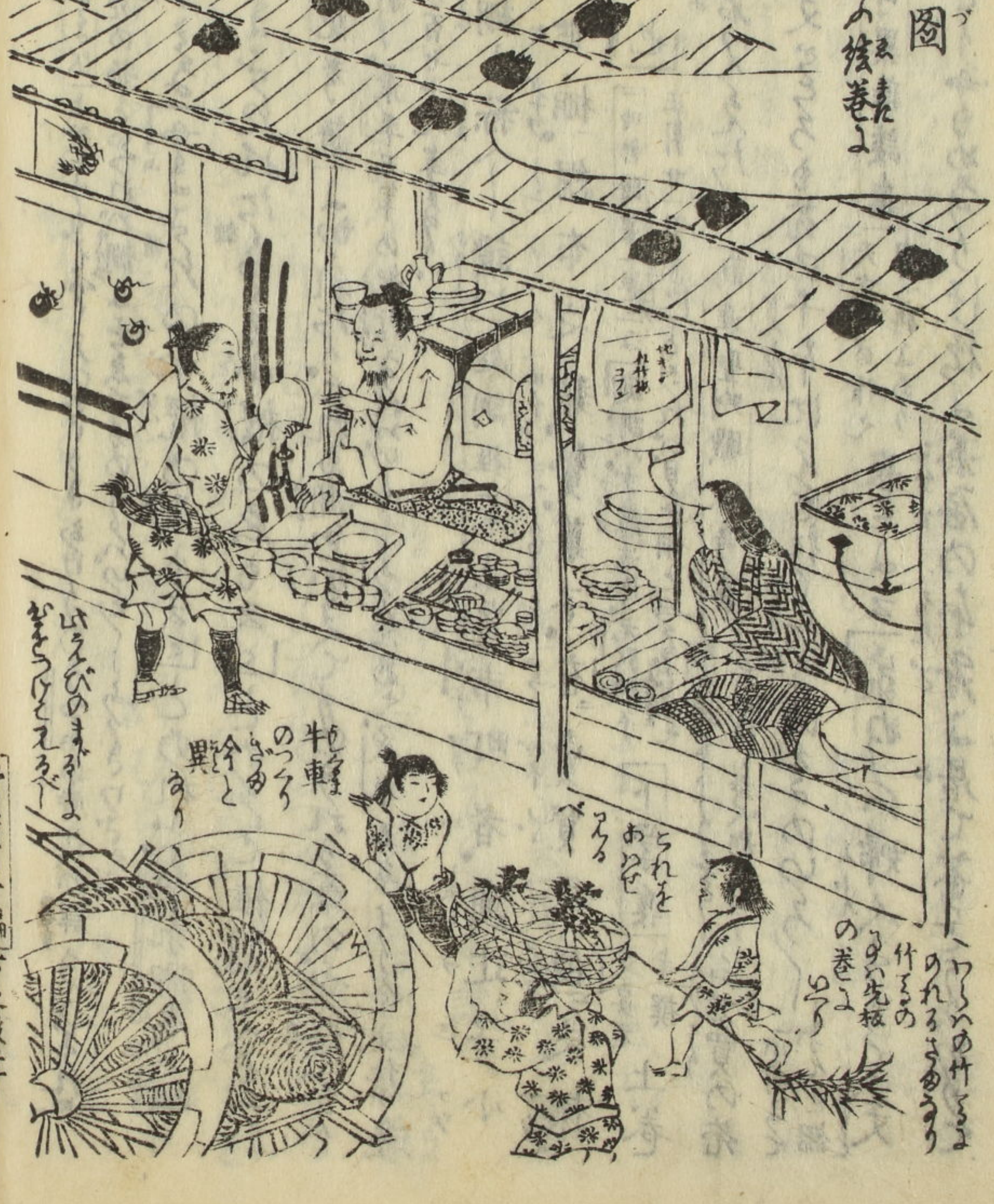
天正
はかのと
らんご

取婦
あつ
らん

紀長谷
雄の草子
福富の草
ふら

柁園所藏

○見世棚古図
これの鏡りしもの後巻
載る不京四條
の所のえせ棚
のえせなま
またの時代
つまびらうあられ
どもあやう文安
宝徳のころのおと
ありの考あり
さへあやう
あらう。外百番
あうらの松山
あつらうたひ
此後巻のころ
がきに似る
とらあうこれ
文安宝徳
のあと
さへ
とら



はあびのま
あつらう

牛車
のつろ
あつら
異冷と

はあびの竹
あつらう
あつら
の巻
あつら

七卷の
辭庭
訓
古抄
ついで

よつとをりつてつりに棚をほりて。胡凡五六を却てうか
醒云今由八百
棚をききうけ
瓜茄子

運歩色葉集 天文十六十七の
あひのの撰 卷四見世棚の名をいひてり。

北條五代記 ひらりまが
卷十 天正十八年の條よ云「お又松原大御所の宮のま

通町十町あらぬ毎日市をて七卷の棚をあまくとりてり。お買ありり

として百の賣物よふの買物有て。群集也又云「町人の小をうけ諸國津

浦この名おを替えて賣買市をたて或の見世棚をあまくとり唐土高藤

の珍物京場せんばの縮布しゆくふをうるものあり云と

新市一の棚をあらうと云と
在言記四
榎賣の詞五
あつことうろくの詞その外狂
言よありり
続狂言記
巻河原新市と云狂言よ
けの河原のちん市をいひつり
ていほをうりけまのうふとせん
トまん
中畧
まのるむらに
られたるる。さうりて
出ませのとのれいせとのものもを倅よあふん。

清水物語 寛永十五年刻
寛永十五年刻 上巻よ云「四條五條の辻よりほおをせとてたまひとら

ソツとさぶぐの物とをあらめてあさ人の用次第よりありのれ
科紙商賣付子見せ棚て
松左は
うりぬ云と

貞徳文集 松の屋
載本 下巻よ云「科紙商賣付子見せ棚て松左はうりぬ云と
曾董上編
下之後三十一

け文かぶの寛永のころあ作れり。昏中よ
考へるあり。考へ安三年中り。
せ棚のうほを考へかりぬべし。

○高賣往来 ふも見せ棚の名えされが
をた世までもあつとる
たあふん
今もあふ
○上のな園を考へる。右の往來の
え縁以後のあ考證別あり。
長のれんよ三つたちらる。あふり
ちとらをあきのれんわけうらうよ
海老をあける。今の目あふり
のりとして。今ならるるをた
ゆをえひるるといふ。今もあふり
のりとして。今ならるるをた
ゆをえひるるといふ。今もあふり
これよりいふ。今ならるるを
たゆをえひるるといふ。今もあふり
これよりいふ。今ならるるを
たゆをえひるるといふ。今もあふり

○虫のたれ絹 十六

夫木抄 丸の巻
夏部三 正三位李能卿 夏草の哥小

草うらむひのたれきぬ結びあけてとらりつぐらふ夏の旅人

此哥のひのたれきぬい。夫木抄のうられ難義の二つあり。詩林拾葉

卷三よ右の哥を注して云「蛇のきぬききたるを虫の垂絹と云也夏時

行旅人草中れをよせかりぬあるべし」といふいふことあり。

家集下
...の
...の
...の
...の

○虫の垂の古圖

此外古圖はなえ

○続世継

ひのたれ...

○旅行の体...
これに従者の男と...

夫木の哥の...
...の



菅虎三暮

○再案...
...の
...の
...の

○輪鼓 十七

輪鼓ハいとふるき...

二人諸雜藝之中...

腰鼓而輪轉於絲上...

蟻の問答...

を蟻といふべし...

野守鏡

永仁三年に上巻云...
...の
...の
...の
...の
...の
太平記 十卷 鎌倉

兵火事付云く條小云 爰小誰と不知輦子引兩の笠符付くる武者

五十餘騎云く 壘囊鈔 文安三年作 小兒の翫物の中小輪子の名目見え

たり 同書 同卷第 幕紋の名目の中 輪子 又輪鼓とあり

これらと参考するふ 伎藝も けいこも けいこも けいこも けいこも けいこも

伊呂波字類 林遠節用 運歩色葉集 等中 輪鼓の名見えこれバ近吉までもらう

○子日れ雛遊 贖物の比比奈 十九

宇都保物語 卷の十 大宮 正月二をよの子日百目あ

まゝといひひきつ時ひのたむびふ糸毛の車 又箔おける車と箔おける

手にひきせてひのたむび人のせあうて子日のたむびのたむびて宮

らりてその馬ふひのたむび人のせあうて子日のたむびのたむびて宮

とあふまふひのたむび人のせあうて子日のたむびのたむびて宮

骨董上編 下之後廿四

あの人の子そかきありくまどこれお似てりいあ人も今もつらむびハ

○國ゆりの巻の下もひのたむびの事 王琴と云おをひせり

○江家次第 卷十 立大子の條小阿未加津ふあうて比比奈の名見えり

案ずらふふにひの比比奈の今加婢子のたむびて贖物の人形あえなれば

の遺意あうてこれらひのたむびのたむびのたむびのたむびのたむびのたむび

○國古記 慶長三年三月七日この日のたむびのたむびのたむびのたむび

以後のたむびのたむびのたむびのたむびのたむびのたむびのたむびのたむび

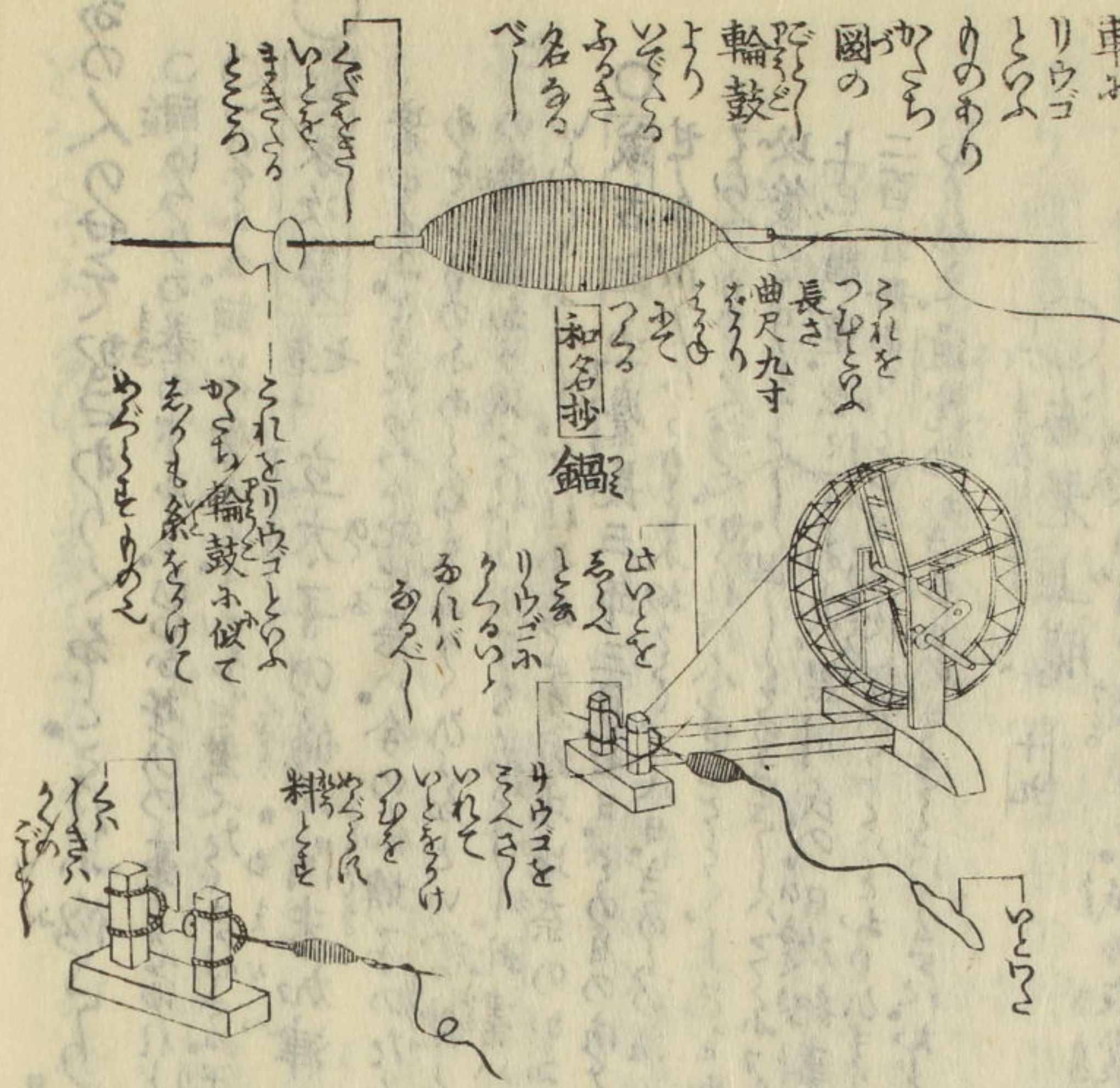
二百廿冊ありとのる 昭次記のたむびのたむびのたむびのたむびのたむび

○海老上臈 十九

今つらハのたむびのたむびのたむびのたむびのたむびのたむびのたむび

寛文十二年の 正長 海老上臈

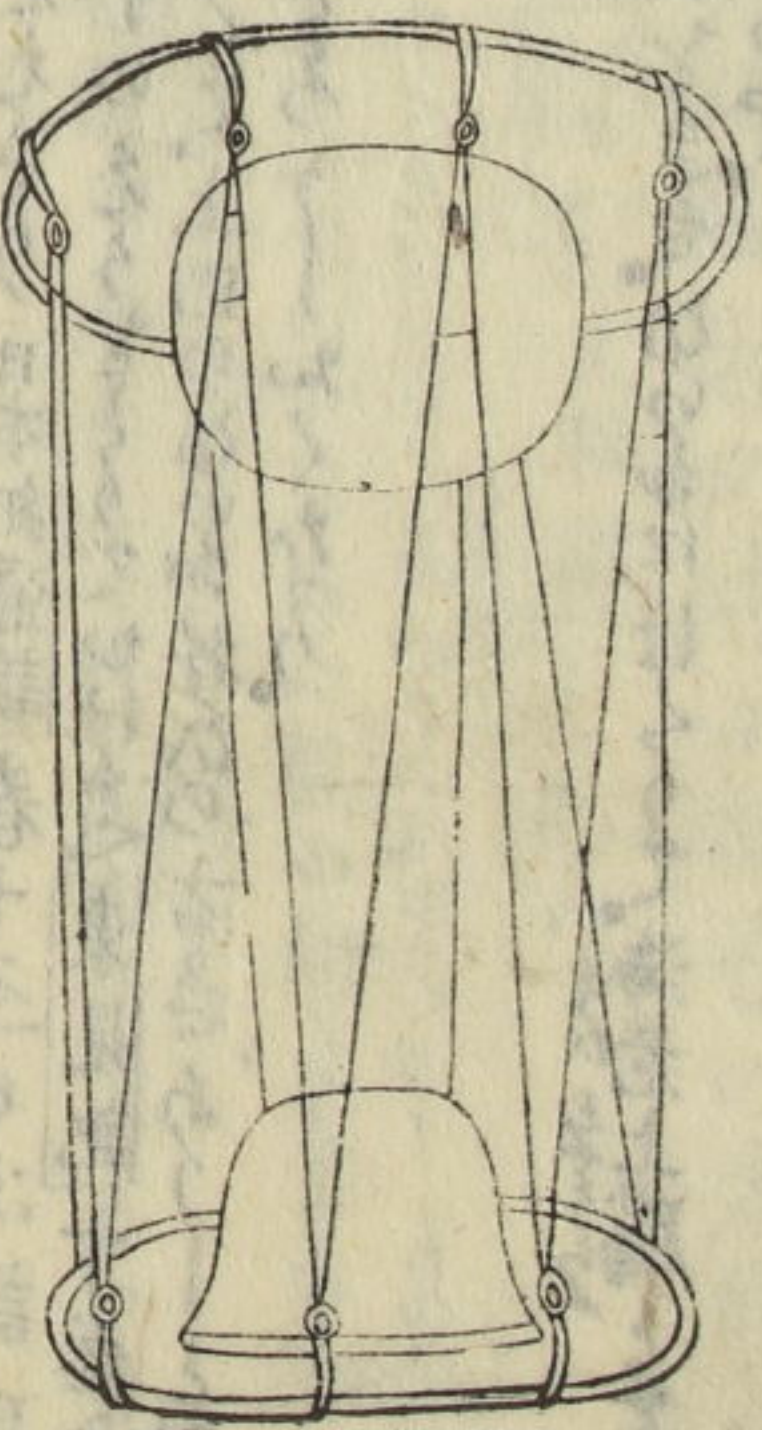
○糸より
車
リウゴ
ののわり
か
の
輪鼓



○紡車

○腰鼓圖

眠の王城の三才園會
卷三器用三載



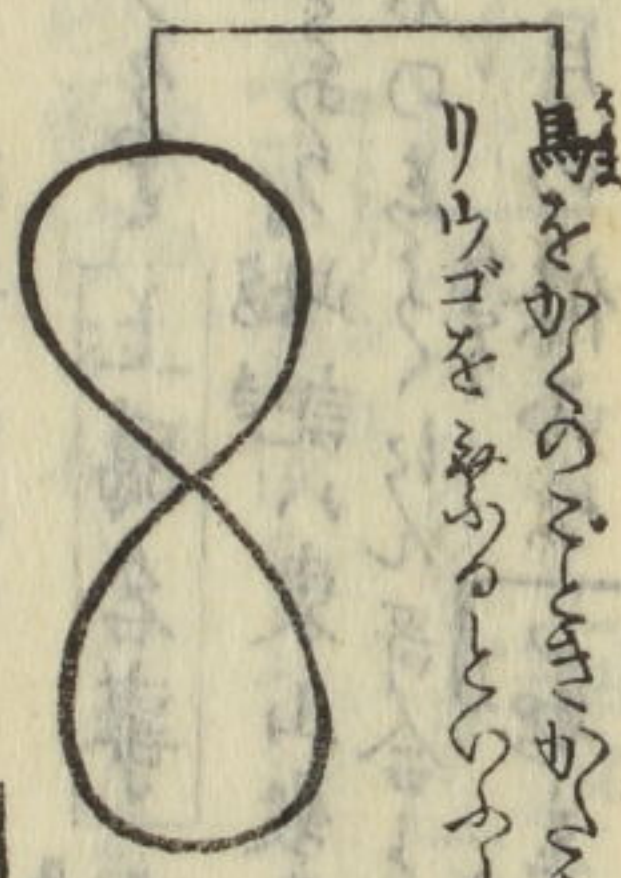
和名抄 小... 其形細腰鼓の...
東海道名実記 卷四... 座...
の宿の各物...
備...
當時...

骨上編下之後廿五

○刀の柄一種か...
あ...
リウゴ柄

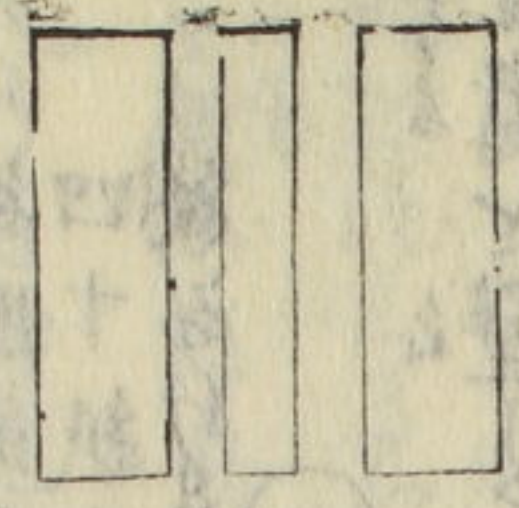


室町家の... 見聞諸家紋



馬...
リウゴを...
リウゴの...
似...

○寛永の... 文中に
は... 文様
リウゴ



中... 引...
三...
三...

○今...
機...
考へ別... 中編

○かく...
り...
あ...



○腰鼓兄弟 二十

世説補 卷十九 注小 南史曰 沈懷之三子 淡深冲 名譽有優劣 世號為

腰鼓兄弟 抄撮 唐禮樂志 腰鼓 廣頭而織 腰鼓兄弟 蓋言伯

季優仲劣也 仲の子ハ三人の兄弟 名譽小者なり 腰鼓兄弟と云ふは

細腰鼓のこゝろ 西頭ハひろく 腰ハ細きもの ありたり 和名抄 フリウゴハ

四十紙 右に 乾闥婆の細腰鼓あり 草稿ハ全文をまゝ 陀羅尼集經 卷第十三の

○おわべ豆腐田樂豆腐上物 二十一

豆腐と壁とのことあり 先板の巻小のれど 豆腐賣の月レ哥小 女房こぼとのる條

擧 七十一番職人哥合 豆腐賣の月レ哥小 女房こぼとのる條

小 女房こぼとのる條 女房こぼとのる條

○宗長手記 卷下 大永六年十二月の條云 女房こぼとのる條

胃上編 下 後六

田樂もうふの益たびありて 上巻中も 六七人ありて 田樂の

俗説ハ豆腐皮をわだのハ訛言あり 本名ハ

異制度訓往來 小豆腐上物 本名あり 豆

腐とほくろと 濁アそとるより 俗説あり

音便ハはのどと濁アそとるより 俗説あり

もろとゆと横ハわだのハ訛言あり

○菖蒲曹再考 二十二

延喜式 卷四 十一 彈正式云 凡金銀薄泥 不得爲服用 并雜器飾 但五月

五日 諸衛府 甲冑之飾 不在制限 辨内侍日記 卷下 建長四年五月五日の條云 女

房こぼとのる條 女房こぼとのる條

房こぼとのる條 女房こぼとのる條

建長四年
化十年
で凡五百
六十二年
あり藤
ありの
ありの
ありの

けしきちんたきり并内侍

○案に建長四年の深草院内十年の時増々み
なり一併の侍内侍を置きたるの女房たり
させむひしあるなり○先板の巻ふま
年のを引つれど日記に建長四年より
先板の巻ふひりり合せり

○板風呂湯銭風呂屋 二十三

今物語にあり僧の湯銭風呂屋

今戸ある物とききゆ此物語に信實頼臣

風呂といふ名入るる事とんんんん

○日蓮御書録内 卷三 四條金吾小おくれ

便の由有べし常小湯銭さるるのあり

文永三年の當時も湯銭風呂屋あり

太平記 卷三 延文五年乃

骨董上編 下巻九七

所ふ今度の乱ハ併島山入道の所行也

呂の女童部までもそてあつひけ

女あどもあり

○提燈再考 三十四

朝野群載 卷 應徳二年十月卅日 法定院佛聖供

置佛像之前無挑灯柱云々

挑灯の字派らるる

字如何 答 挑灯と書て子ヤウチ

行の字とアンとよむ事 行在行者等也

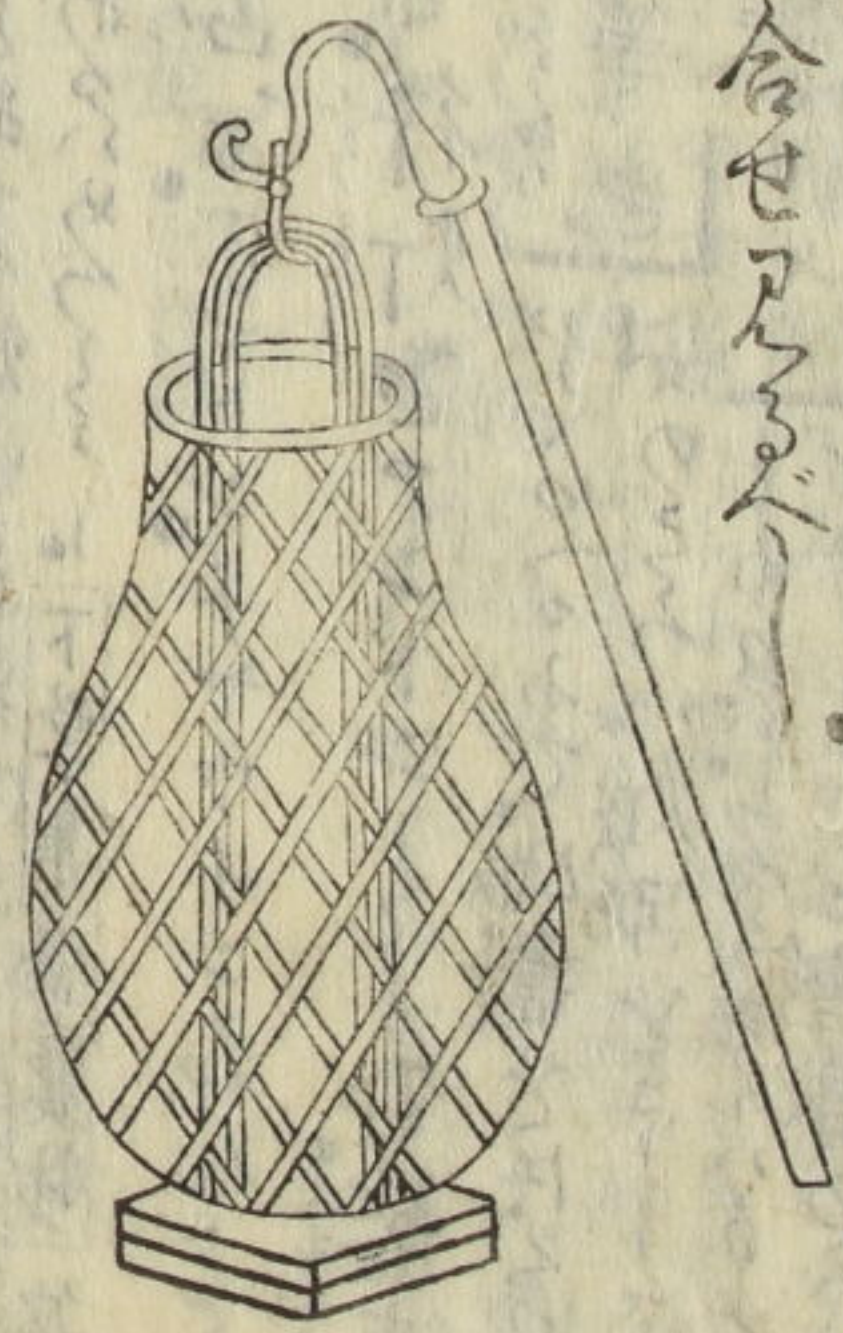
唐話纂要 卷 挑燈

走衆故實 天文永祿のころ

塵塚物語 天文廿 卷五 雷事

先板の巻小唐土ふたふたをうらんとあつてゆれどなすふたふたをうらんとあり但紙をこめて縮をこめて

○行燈再考 三十五
 行燈ハハと提ありく爲小制れる物也。家内ふきあつた後の事このハ證を又コリして、山伏道華送行列次第 杏花園と云ふ古書小畧次
 導師先達持檜 次馬次捧物次左右行燈次棺云々 無縁雙又紙卷尊
 宿茶毘之次第として條ふ一番幡四流左僧持二番行燈四箇右行



○行燈再考 三十五
 行燈ハハと提ありく爲小制れる物也。家内ふきあつた後の事このハ證を又コリして、山伏道華送行列次第 杏花園と云ふ古書小畧次
 導師先達持檜 次馬次捧物次左右行燈次棺云々 無縁雙又紙卷尊
 宿茶毘之次第として條ふ一番幡四流左僧持二番行燈四箇右行

○行燈再考 三十五
 行燈ハハと提ありく爲小制れる物也。家内ふきあつた後の事このハ證を又コリして、山伏道華送行列次第 杏花園と云ふ古書小畧次
 導師先達持檜 次馬次捧物次左右行燈次棺云々 無縁雙又紙卷尊
 宿茶毘之次第として條ふ一番幡四流左僧持二番行燈四箇右行

骨上編 下之後九八

者持云々 行燈ハハと提ありく爲小制れる物也。家内ふきあつた後の事このハ證を又コリして、山伏道華送行列次第 杏花園と云ふ古書小畧次
 導師先達持檜 次馬次捧物次左右行燈次棺云々 無縁雙又紙卷尊
 宿茶毘之次第として條ふ一番幡四流左僧持二番行燈四箇右行

先板の巻小 秋の夜長物語 と引て、ぎよなうのちやうらんとあつた魚綾乃
 誤りて綾とありける 挑燈とありとて、假名おわけとて、後小古写本と云ふれば、魚腦の
 本ハぎよなうのちやうらんとあつた魚綾乃とありとて、假名おわけとて、後小古写本と云ふれば、魚腦の
 燈炉とあり、これた、かゝる證あり、燈炉とありとて、挑燈と燈炉ハひとつ物なれば、古印
 とのまへへきと上ふりて、ごごくと挑燈と燈炉ハひとつ物なれば、古印
 本ふちやうらんとあつた魚綾乃とありとて、假名おわけとて、後小古写本と云ふれば、魚腦の挑
 燈とありとて、唐国の魚鮓燈の事、明の田汝成、西湖志餘 卷小 燈市

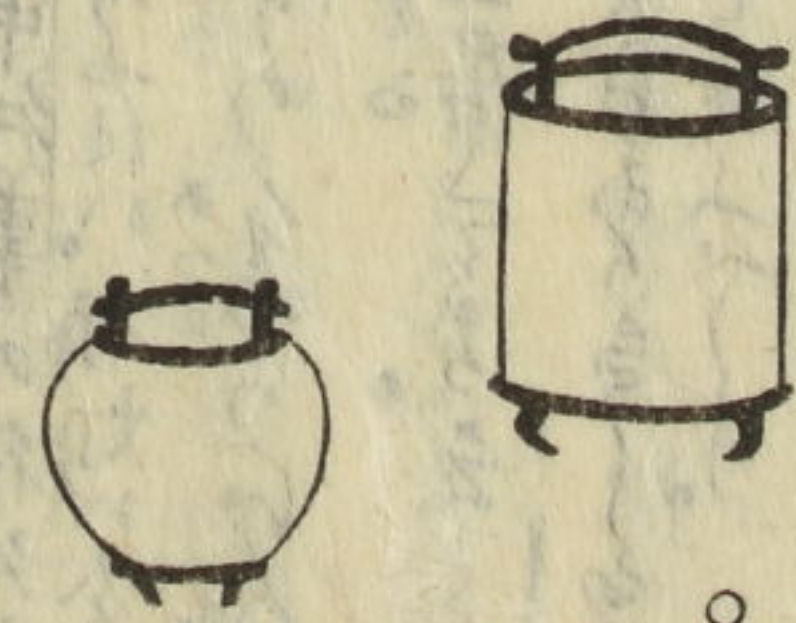
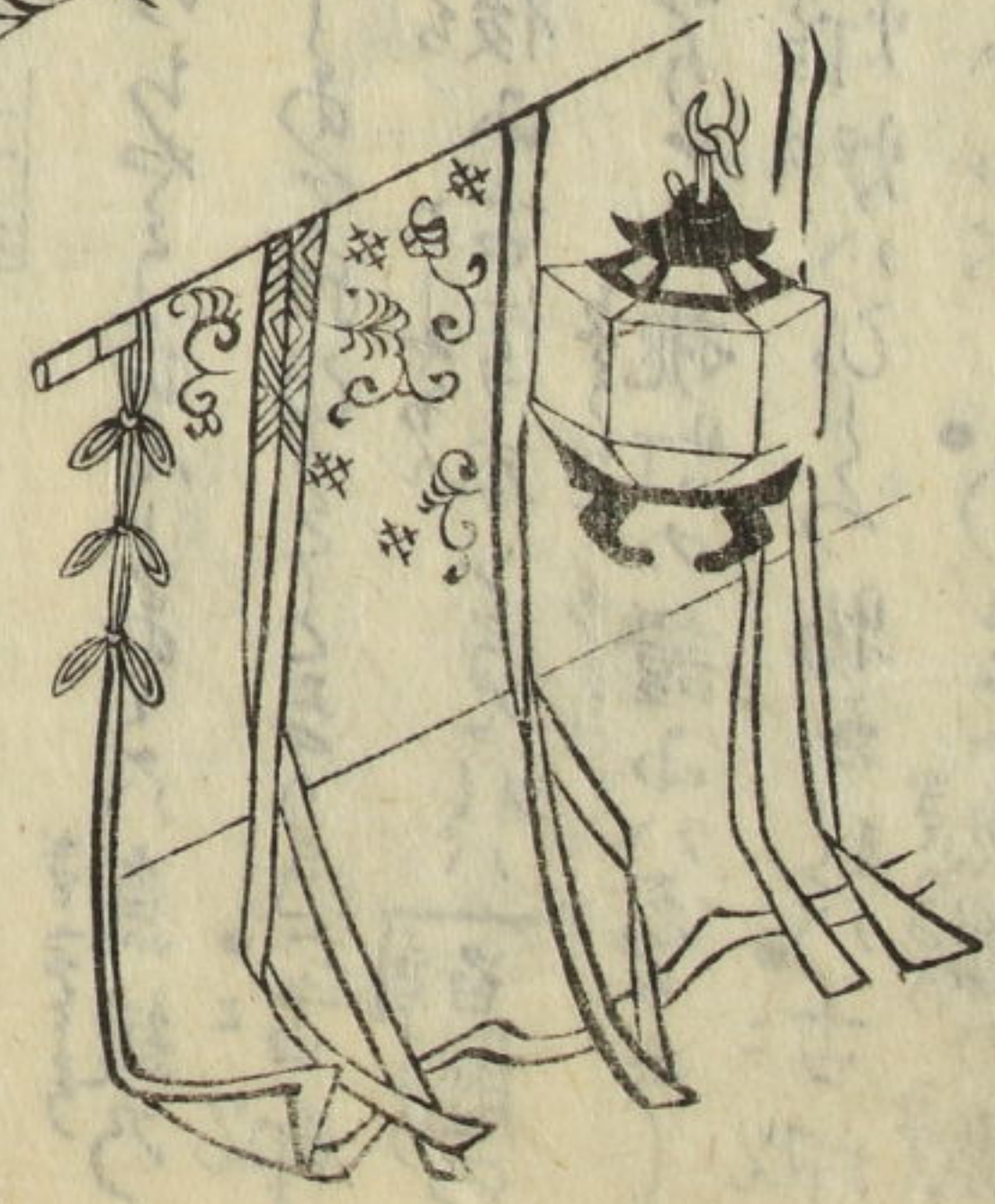
西湖志餘

卷小 燈市

○古画行灯挑灯

三十七

○これのみし行灯と云ふありきる
たゞる證之今茶人のめりたる
露地あんどんとりもの古制の
のりたるこれゆきる



○りみし挑灯と云ふありきる
はたしひのりありきる

○は二つも
あんどん
きる

骨董上編 下之後九

出售各色華燈中豪家富室則有料絲魚魷云々

ハ豪富ふあつたれば得かきやれ高價の物もべ

ノ中ニ魚魷を載て價低きものハ成器難得とあるもおのひやべ

爾雅十卷釋魚の條下魚枕の事詳之本草綱目十四魚魷の條下諸魚

の腦骨と魷とらふとあれ古へ此ハ渡りき

炉とも挑灯ともさるる一あるべ

色正青云々枕如琥珀可以籠燈

形似鯉而背青色又頭中骨煮拍之可以製器

打ひらきて灯のおもひはくれるものありん琥珀のこ

ののちれはあつた

林逸節用器財門魚腦瑤之

桂川地藏記 弘治二上巻外魚腦

撰槐象牙引壺頗黎卮瑠璃壺云々

はらから魚鮓を。寶貨を。よりとまらざり。

○淮南子三卷天文訓云月虛而魚腦減これハ月の十六日以後ハ魚のわぢら

王羲之蘄茶帖書記洞詮卷云云石首魚食之消尻成水此魚腦中有

石如菓子これハ魚鮓アレバ...

○胡鬼板胡鬼子毬杖再考三十八

年中定例記正月十一日... 胡鬼板胡鬼子毬杖再考

○手鞠二十九

今の世ハ正月女のけりハこれハ... 手鞠のけりハ... 冠辞考七卷 瑠比

古事記傳卷二

もあつらふ... 暹羅暹羅... 寛永正保のころの繪ハ...

平治物語卷上

許して音有物あり云云... 又下悪源太為雷事の段云云

東鑑卷二

四月十三日若君出御南庭有手鞠會... 同日廿八日若君出御西御

壺有例手鞠會

廿三日の條云云... 弁内侍日記卷上 寛元五年三月

增鏡

五うらの雪の條云云... 御草院

二巻... 盛衰記 卷三十四 中編 石巻の条...

親王... 將軍... 朝經卿... 六歳ハ... あり

明月記
嘉祿三年
十一月十
九日の
條に
手鞠を
連歌の
かひゆふ
せられたる
事記さ
たり

とてあつてありませば、いふ事にはあつていふ事ありありとありていふ事あり
拾政居るに、さういふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
まじりていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
わづらひていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
二少云 禪靴として坐禪の時眠をさまさんぐたり、頂におく手鞠のやう
ある物を、又巻八の云、或人の女腹中ふたある手鞠のやうにして石の如く堅
物有云く 太平記 卷廿三の 空より毬の如く物光て叢の中へそ落さ
げり 流布の印本の誦いあつて、さういふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
消息云 手鞠鞠打は可被張行也 遊学往来 卷上正月の童遊ひの名
目云 少性之拵云く 獨楽と拍毬石子云く これらも正月の事
云云 面々偶々合々之次圍碁將其雙六下結揚弓手鞠亦終日て張
行中云 かねて室町家のころまで、會してさういふ事ありていふ事ありていふ事あり

骨董上編 下之後世

○これハ文祿慶長のころに繪ある
時代の考へ別ありありとありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
手鞠とていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
わづらひていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

天保拾四



當時の画をいふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
慶安二年の印本
尤之双紙 上巻ふりていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり
袖ふりていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事ありていふ事あり

これハ龍のいりたる
わきまにさしこみ
たる國とおもひ
屏風の繪
寛永正保のころ
のまじり



京山人物樹景
百

東鑑のころに注せるの小手鞠を手毬小作と手毬會ハ打毬の事と云
ふころ一異制度訓ハ小手鞠打とありて二種の也とせり也
打毬ハ小手毬と云ふころ一

骨董上編 下之後世二

此古画を以て手鞠と
はくはくと蹴鞠とあり
うつれるいさあるよと
考へおのり
東鑑小手鞠會と
ありもこれおのり
ありと云ふ
ありと云ふ
ありと云ふ
ありと云ふ
ありと云ふ
ありと云ふ
ありと云ふ
ありと云ふ
ありと云ふ
ありと云ふ

ちよせん髪
うんが別ふまり
中編のいり

江山堂所藏



貞享四年
年ヨリ今
文化年
ヲ自升
七年ヲ
へタリ

○天和貞享の比の雛人形 [三十]

○真面目と云ふはまことに圖のごとく
○井原西鶴が遺稿と元禄八年
印行せる俗謡に云く「この年のあり
四のまはつた養女のさかひとまはつり
そのまはつたさかひとまはつたまはつた
その後のまはつたとまはつた
」とのわけほつたものなれば
おあつたものとまはつたものと
おひつたものとまはつたものと
おまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと



骨董上編 下之後世三

京山人百樹所藏

○信濃羽子板 [三十一]

○此古制佐久郡の辺のそとへよる
とぞ竹素わくおのづから古雅に
おひつたものとまはつたものと
おまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと
おなまはつたものとまはつたものと

此古制佐久郡の辺のそとへよるとぞ竹素わくおのづから古雅に



松雲庵藏



木地ノゴ

4寸

虫ハ
色の名
あり
難定難
束抄巻
三巻の
襖の青
の借字
和訓榮
小玉の
よふ
みよと
りつら似
る各
名
おきら
おきら

宝物集
平家物語
盛衰記
酉陽雜俎
繪巻等
ハ先板の
巻小
引けり

○虫のたれ緞の追考 三十三

和哥分類 七巻衣の部 虫のたれ衣 御集 必とありて鳴もあはぬけり
後柏原院 あり 柏玉集 四巻秋哥上 虫
三玉集類題 秋虫 必よかけたる虫は
おのた 衣よと 衣と字の形に似たるあていづれり一方あやまるとあり
べし ありまれ 此所製ハ虫のたれまぬの所 哥ありぬ せられまぬ
とせりハ 和哥分類のあやまりと おのひまふべし

○打出小植追考 三十三

宇都保物語 卷上 俊蔭波斯玉ありて 何修羅があづかぬる 室の本とを
こととりの所小 此本の上中下 ありありの 大福徳の本あり 一まんどのり
むあきつちとなくふ 一萬恒 沙のたれ ありびぎ本あり
骨董集上編下之巻後終

骨董集上編 下之巻後終

○追加 姫氏節供 髪葛子節供 三十四

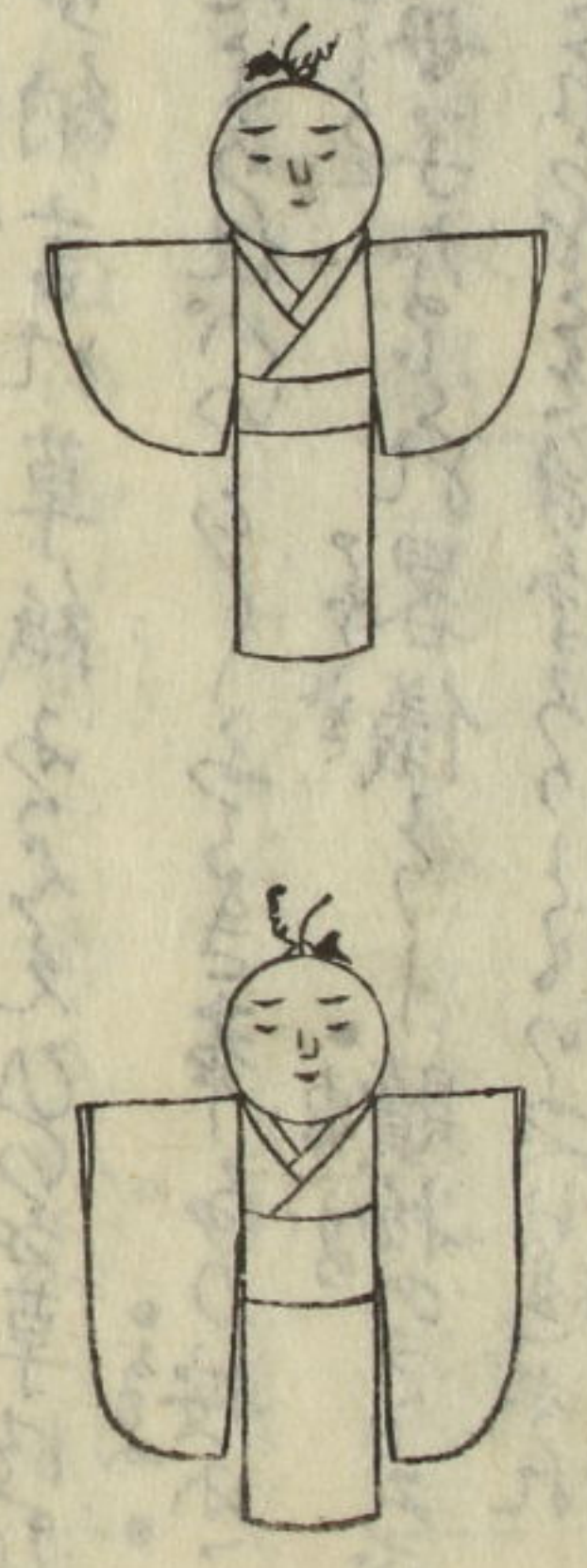
今伊勢桑名けりれ 俗女童れこらふ 八月朔日と 姫氏の節供と
ひら丸小顔を画きまふね ころのとりどりて 頭と け木 又竹の筒を
と 紙又縮かとの衣服とまかせ ひと人形はけり 棚ふす 酒赤飯
あてまひる 又九月九日と ぬぐりの節供と ひと草はこちひさく
男女の頭とけりり これも 棚ふす ありて 物とてまらんと 前
いさごころ 丸と教りく 事ハ 清少納言れ 草紙あんなえ ひと草は
源三位頼政卿の父 源仲正 哥にまられいり みる事あり 按ふこれら
はひめ 質朴あり 吾ふ 天見母子なれ 畧儀と 贖物のころび
まはるる 古俗のたれあり
○和名抄 せんふふ 今のかりと 古ハかぐらと されば かつこの 節供と なるも みる事あり 按ふこれら
らま 後のひのあ 此かぐら子の 事のうづらわ ありや 江戸ち 地め
ひの草つとて ひとあつと ありまれど ありて まらんと ありせん
○此事ハ 伊勢の桑名の 公麻呂の のりりいひ おとせり 此巻をかきり

たるものちなままでどいつめんの質素のあつらひをきりのあはれ、いさゝか考へてくらゐ
 のまきのせり、前の條よ合せらるべし。

攝陽郡談卷十六「姫」

任吉郡、遠里小野の田圃、お作り
 所、これ市、店、お出せ、多、お、堺道、よ
 あり、た、さ、鷺、の、卵、の、ご、と、く、色、
 き、の、め、て、白、く、ゆ、と、り、て、人、の、面、を
 画、か、ま、て、幼、童、の、顔、と、い、ふ、あ、ひ、に、
 黄、色、あ、る、も、あ、り、黄、白、と、い、ふ、
 美、麗、と、い、ふ、れ、て、艶、き、形、と、
 以、て、号、し、と、い、へ、り、此、書、ハ、
 元、祿、十、四、年、印、行、せ、り、
 これ、も、その、ま、ち、あ、り、
 ひ、ち、う、の、ひ、の、ま、を、い、て、あ、ま、ひ、
 なる、後、之、前、の、ひ、ち、う、の、ま、を、い、
 引、の、せ、ら、れ、た、筆、の、は、の、を、い、
 こ、ふ、筆、

○八月朝日姫氏雛圖



○九月九日髪葛子圖



骨董上編 下之後世五

○中編前帙二卷標目

- 花むすびの考 ○唐土の鞆子ハ此の羽子れ子ぬ似たる事 ○魚とくるとの再考
- きつと灯籠の考 ○獨樂の考同古圖とさぐ ○梓現寄絃口寄の考同古圖 ○編笠の考古圖とさぐ ○端午れむらり花五月まのこの考同古圖
- 宗任が梅花の哥の考 ○朝夷名が鶴の紋の考 ○鯨の考 ○編木摺門説經の考同古圖 ○放下僧さまりことあやめことあや竹の考同古圖 ○千駄櫃の商人の古圖 ○せんト物賣の考同古圖 ○茶筥髪三里紙の考 ○女の髪
- の風古圖とさぐ ○そんト物并ふ文字入の文様の考古圖とさぐ ○目黒のゆら花の再考 ○やゝをどり ○玉 ○棚機の牛馬 ○尻おひ比丘尼 ○躑
- の古圖とさぐ ○蠟燭 ○若衆哥舞妓れ古圖 ○皿屋敷の考 ○手管と
- いゝ詞ののこ ○梳久塚の考同寄進 ○祇園梶女の肖像 ○友禪漆の考此外あまこわれとさぐ

追加 望千句辨法 辨法のみひやくありやめりあけ打らるるに... 前句小 望千句の... 後述... 此はけ
 たうさねももうあり打の一能と云ふ... 誹諧家譜... 杉田句當望一八寛永七年六月二日
 没せり。行年八十三ありき。これれれあまふ天文十九年の生れ也。いまだうあり打のたふさるる時多し。此外
 うあり打は 怨霊のこもたせさういふさきのみあまふ... 誹諧家譜... 仙臺比丘尼坂とのみあり
 徳元が著せる 誹諧初学抄 意の細ふうあり打とせり。誹諧家譜... 仙臺比丘尼坂とのみあり
 ひくに改法ともわけらる時鳥 松山政世とあり。これびんたの娘と云ふさるる句に 仙臺比丘尼坂とのみあり
 〇これらに龍のそれくの条ふ合せよと云ふ。

江戸 醒齋老人 著 京傳

備書 島岡長盈

同 藍庭林信

凡例目六下之卷末自
廿四紙 至卅六紙
名古屋治平

刷人 朝倉吉次郎

加減朱子讀書丸

一面 〇氣んとはけり 〇おおひえとくは 〇心腎のまゝとんをぬき
 一五五分 〇生れつきまゝとく多きもの用と云ふ 〇老若男女小ぢりくはあふを
 はらひてめりて心をつゝあ人のあつゝ病をさして天壽をとるるよしやくけさる用て層をぬき
 〇猪めふたろて益多し 〇つゝのよひまや 〇粒を所獲あり 江戸京橋南 山東老店
 印章篆刻 〇玉石銅印古体述体ゆふふ應と 〇石上刻一字
 一紙次刻一字朱文七か白文五分大印八此限あり

骨董上編 下之後世六

